



人生をゆさぶる

Boldly Venture

永田円了

日常という惰性的時空のなかで、私たちは自分を埋没させ、記憶を平坦化させる。人は愉楽と安逸のなかで、自分が腐食し生の力を失っていくのに気づかない。自己喪失の過程のなかで自分に出会うには、何かゆさぶり、それも大胆な「人生のゆさぶり」が必要となるのである。

真のリスクは、リスクのない日常に潜む

ウナギの養殖では、稚魚のシラスはカナダから飛行機で輸入する。12時間の空輸のうちに、8割は死んで届けられる。しかし、水槽に稚魚の天敵であるナマズを放して運ぶとどうなるか？なんと、稚魚の2割はナマズに食べられるが、残りの8割は生き生きと日本に到着する。

稚魚にとっては、ナマズは敵、しかし実際はこのリスクのお陰で、稚魚は元気でいられるのである。人生、いや魚生にも生きていくうえで、“ゆさぶり”が必要となるのである。

米国シアトルにあるショッピングセンターでのこと。5000台収容の駐車場をもつこのショッピングモール（Bellevue Square）、駐車場からモールに入る道路にあった横断歩道が取り外された。何故か。実は歩行者が車に跳ねられて亡くなる件数が、横断歩道できわめて多いというデータが米国で発表されたからである。

歩行者は、横断歩道という安心領域の中で惰性的に無防備になるもの。横断歩道をなくすることによって、リスク（ゆさぶり）が与えられ、歩行者は左右を確認し、自らを守りながら道路を横断することになる。ウナギの稚魚が、ナマズという“ゆさぶり”を意識した結果、生き生きをして日本に到着することと同じことなのである。



就活自殺の背景



就職に失敗した大学生の自殺が増えている（内閣府発表：150人/年）。就活をはじめてから、「本気で死にたい」と考えたことがあるか？とのアンケート調査に、21%があると答えたという。5人に1人の割合である。

人生は山あり谷ありの凹凸の道のり、失敗からの立ち直り方が身につけていないのである。小さい頃から、周囲の評価を気にして生きて来た。当たり障りのない、いい子でいれば親にも先生にもほめられる。特にししゃばらなければ、イジメも回避できる。角もなく、個性もない、“順調”な生き方をしてきたのに、会社の面接で、君の個性は何か？他の人にできなくて、君にできることは何か？と聞かれても答えようもない。こんなゆさぶりは体験したことがないのである。

今の若者たちに真に必要なことは、自分自身を生きる上での根本的モチベーションだ。と同時に、この“人生のゆさぶり”にくじけない忍耐力、いやその“ゆさぶり”から学ぶ貪欲さが求められるのである。

<事例 DVD>

矢沢永吉 / 人生はゆさぶり、ゆさぶれば、面倒くさいにきまつてるじゃん、

森 毅 / 常識からはずれたことをするのが若者

視点・論点 「就活自殺の背景に迫る」 解説者：清水康之

蛭川幸雄 / 嫌いなことも、意味を問うな、スーとやる

養老孟司 / 学ぶ＝自分が変わる、墓地を散歩、身体を動かす

画家・松井守男 / 自分のワクを超える、嫌いな色と好きな色を混ぜる

映画「リンカーン」 / 鯨捕りのメタファー、コンバスのメタファー

映画「Catch me if you can」 / ロータリークラブでのメタファーのスピーチ

綾小路きみまろ / 現実を誇張しての人生ゆさぶり、秋田美人は薄命、

笑点 / 笑いでゆさぶり；暴走族が高齢化したら、

映画「レナードの朝」Awakenings / ゆさぶりが終わった後の、二つの目覚め

